

2026年の「清明(せいめい)」は4月5日です。

清明(せいめい)とは万物が清らかで生き生きとした様子を表した「清浄明潔(せいじょうめいけつ)」を略した言葉といわれます。春の穏やかな日差しを受けて、花が咲き、蝶が舞い、空は青く澄み渡り、爽やかな風が吹く頃です。



清明は単なる季節の区切りとしてだけでなく、沖縄や中国、台湾では重要なお墓参りの時期で、家族や親族が集まり、先祖を敬いながら絆を深める大切な機会となっています。沖縄では、清明の時期に「シーミー(清明祭)」と呼ばれる大規模なお墓参りが行われ、お墓の前で親族が集まり、ピクニックのようにお食事を楽めます。

4月8日は「花祭り」でお釈迦様の誕生を祝う日です。花祭りの正式名称は「灌仏会(かんぶつえ)」といい、「甘茶を仏様へ灌ぐ(そそぐ)」ことが由来とされ、たくさんの花を飾った花御堂(はなみどう)を作ってお祝いすることから「花祭り」と呼ばれます。花で飾った小さな堂の花御堂の中の水盤(すいばん)に誕生仏を安置します。参拝客は柄杓(ひしゃく)で甘茶を誕生仏にかけて、お釈迦様の誕生を祝います。お釈迦様は紀元前5世紀頃の4月8日に誕生したと伝えられています。



甘茶をかけるのは、お釈迦様が生まれた時に九頭の龍が現れ、頭から香湯(甘露の雨)を注いだという伝承に由来します。

甘茶は、ヤマアジサイの変種である「小甘茶(こあまちゃ)」から作られています。小甘茶の葉は苦いのですが、発酵させると砂糖の100~1,000倍の甘さになると言われています。甘茶には「上に立つ者がよい政治を行って平和な世が訪れると、甘い露が降る」という中国の言い伝えから、お釈迦様に甘茶をかける行為は、お釈迦様への信仰の表れであると言われています。

「桜狩り 奇特や日々に 五里六里」 松尾芭蕉

45歳の頃に紀伊半島を旅した際に詠まれた一句です。桜の美しさに魅了され、足が棒になるほど連日歩き回る自身を、半分呆れつつも楽しんでいる様子が描かれています。